金工科、鋳造科、漆工科の予備科理事をつとめ、また、同十二年十一月以降は工芸部第一学年理事となり、自らも工芸史研究を志した。同十三年十二月日本工芸協会創立の際は主事に推されている。田辺の留学について新聞は次のように報道した。

旅券を前に

工藝史研究のかどでに際して抱負の一端をかたる田邊孝次君美術學校助教授田邊孝次君は文部留學生として來月廿日横濱解纜の諏訪丸で二ヶ年間歐米見學をすることとなつた。氏の研究科目は「工藝史」であつて主としてフランスに滞在研究する筈である。因に美術學校卒業生（氏は彫刻科出身）にして學究方面の留學生は氏を以て最初とするものであつて大に美校の爲めに氣を吐いてよい。氏は語る『東洋方面の工藝史は之まで正木校長が講座を持つて居られたが、工藝問題の盛になりつゝある今日、更に歐米の工藝品に對しても研究する必要を感じた爲めに私が行くことになつたのだと思ふ。途中エジプトに寄つて古代の工藝品を研究し後フランスに行くことにした。巴里では丁度明年四月から萬國工藝美術裝飾博覽會が開催されるから非常に好都合である。尚ほ私は前田侯爵の紹介で巴里の家庭の人となつて深くパリジャンの嗜好、實用方面をも研究することにしてゐる。その間英、伊、等をも見學、米國を經て大正十六年四五月頃歸朝の豫定である』と。氏は既に大村西崖氏に師事して東洋方面の研究は五ヶ年ばかりやり今回の歐米留學によつて西洋方面の研究も出來るわけで歸朝後は新に「工藝史」の一講座を擔任することになつてゐる。

（大正十三年十月二十七日『読売新聞』）

田辺は大正十三年十一月二十二日に出発。追ってイタリアも在留国に加えられた。彼は本校校友会文芸部監督や月報編集発行代表者を長くつとめていた関係上、滞欧中の消息や論説が月報に掲載されており、足跡を辿ることができる。論説の題目は次のとおりである。

仏蘭西の美的教育に就き（一、初等学校）　第二十四巻第二号
セーブル国立製磁所を見る　同第四号
千九百二十五年巴里万国装飾美術工芸博覧会に於ける工芸構想の主潮（文部大臣へ提出の報告書）　第二十五巻第一号
同（続き）　同第二号

帰国は昭和二年一月十七日で、直ちに復職し、同年四月より「工芸史」「東洋彫刻史」「東洋美術史」授業担当となった。同十一年東邦美術協会発行の田辺著『巴里から葛飾へ』には上記の留学中の事柄が詳しく記されている。

⑧ 正木直彦校長の支那旅行

正木直彦は大正十三年十二月十九日、外務省対支文化事務局主催南支旅行団（文部省直轄学校教授二名、生徒二十名）の団長として東京を出発した。正木不在中の校長代理には高村光雲が任命された。

この旅行については正木の「南支那旅行談」（大正十四年一月三十日国華倶楽部総会における講演の筆記。『東京美術学校校友会月報』第二十

三巻第八号所載）があり、また、正木の『十三松堂日記』第一巻（昭和四十年、中央公論美術出版）にも詳しく記されている。正木らは十二月二十一日長崎を出航、翌二十二日上海到着後、上海、蘇州、南京、鎮江、上海、寧波、上海、厦門、汕頭、香港、広東、香港、澳門（マカオ）、香港、台湾を経て同十四年一月二十六日下関に上陸、翌二十七日帰京した。

昭和六年五月に至って外務省文化事業部は『中華民国教育其他ノ施設概要』を発行する。本学附属図書館にも一冊所蔵されているが、それには「正木直彦氏寄贈」の印が捺されている。本書には正木の視察旅行の成果も含まれているに違いない。

⑨ 震災前後の図案科

帝展第四部設置に向けて工芸界には活発な動きが起きてきたが、左記はその新しい工芸の動きの前夜にあたる時期に在学した上田幹一（大正十五年図案科卒業）の回想記である（数字は漢数字に統一）。

私が東京美術学校の図案科に入学したのは大正十年で、卒業は十五年であった。当時は入学した四月から七月までは予備科といって、ほんとうの一年生になれるのは九月の新学期からで、従ってその後の四年間が本科、残りの九月から翌年三月までは卒業製作期となっていた。私達は月謝二円五十銭の最後の学生（次年度から倍の五円）だから、手続上めったに落第はさせられることがないなどと呑気なことをいっている者がいた。そんなわけだから近代デザイン運動史などと、おこがましくもいえたものでないかも知れないが、今改めて考えてみると一部にはそうしたような動きがあった気もするので、思い出しながら書いてみたい。

美術学校が開校したのは明治二十二年であるが、図案科は二十九年に創設され、すべて英国式によって教育プランが立てられたが、実技の先生には提灯屋が迎えられたとかいうことを聞いたことがある。私が入学した当時、図案科は一部と二部に分れ一部は工芸図案二部は建築となっていて、建築は大正十二年に建築科として独立したものである。

何といっても学校の性格上美術至上で、入学式の当日美術品的偉容をした超一流の教授連が並ぶ前で、正木校長は「諸君の中からたったひとりでも良い、優れた美術家が生れて呉れれば云々」のお話しを聞いて、発憤するよりおやっと驚いたものである。というのは私は東京の工芸学校の木材工芸科を卒業してきた者であるから、美術と工芸の区別は多少なりとも承知しているつもりで、工芸の仕事が純美術の仕事と比べて別の意味があること位はわかっている。それを一緒にしていわれるほど美術本位のアカデミー教育に徹したものであることが、日がたつに従ってわかってきた。

従ってそうした空気の中から型の変った学生が出てくるのは当然で、学生の一部にデカダン的な存在があったとしても、敢て衒う者か或いは一種の反動的気分を紛らす者で、大方の者は学校を中心に打込んでいた。

工芸部には図案科の他に、彫金科、鍛金科、鋳金科、漆工科と